

坂口安吾

桜の森の満開の下

桜の森の満開の下

桜さくらの花が咲さくと人々は酒をぶらさげたり団子だんごをたべて花の下を歩いて絶景だの春ランマンだのと浮うかれて陽気になります。これは嘘うそです。なぜ嘘かと申しますと、桜の花の下へ人がより集って酔よっ払はらってゲロを吐はいて喧嘩けんかして、これは江戸時代からの話で、大昔おおむかしは桜の花の下は怖おそろしいと思っても、絶景だなどとは誰だれも思いませんでした。近頃ちかごろは桜の花の下といえは人間がより集って酒をのんで喧嘩けんかしていますから陽気でにぎやかだと思いきんでいますが、桜の花の下から人間を取り去ると怖ろ

しい景色になりますので、能にも、さる母親が愛児を人さらいにさらわれて子供を探して発狂はつきょうして桜の花の満開の林の下へ来かかり、見渡す花びらの陰かげに子供の幻まぼろしを描えがいて狂くるい死じして花びらに埋うまってしまふ（このところ小生の蛇足だそく）という話もあり、桜の林の花の下に姿がなければ怖おそしいばかりです。

昔、鈴鹿峠すずかとうげにも旅人が桜の森の花の下を通らなければならぬような道になっていました。花の咲かない頃はよろしいのですが、花の季節になると、旅人はみんな森の花の下で気が変になりました。できるだけ早く花の下

から逃にげようと思つて、青い木や枯かれ木のある方へ一目散に走りだしたものです。一人だとまだよいので、なぜかというと、花の下を一目散に逃げて、あたりまえの木の下へくるとホツとしてヤレヤレと思つて、すむからですが、二人連は都合つごうが悪い。なぜなら人間の足の早さは各人各様で、一人が遅おくれますから、オイ待つてくれ、後から必死に叫さけんでも、みんな気違きちがいで、友達をすてて走ります。それで鈴鹿峠の桜の森の花の下を通過したとたんに今まで仲のよかつた旅人が仲が悪くなり、相手の友情を信用しなくなります。そんなことから旅人も自然に

桜の森の下を通らないで、わざわざ遠まわりの別の山道を歩くようになり、やがて桜の森は街道を外れて人の子一人通らない山の静寂せいじやくへとり残されてしまいました。

そうなつて何年かあとに、この山に一人の山賊さんぞくが住みはじめましたが、この山賊はずいぶんむごたらしい男で、街道へでて情容赦なさげようしやなく着物をはぎ人の命も断ちましたが、こんな男でも桜の森の花の下へくるとやっぱり怖しくなつて気が変になりました。そこで山賊はそれ以来花がきらいで、花というものは怖いものだな、なんだか厭いやなものだ、そういう風に腹の中では眩くらいていました。

花の下では風がないのにゴウゴウ風が鳴っているような気がしました。そのくせ風がちつともなく、一つも物音がありません。自分の姿と蹠音あしおとばかりで、それがひっそり冷めたいそして動かない風の中につつまれていました。花びらがほそほそ散るように魂たましいが散っていのちがだんだん衰おとろえて行くように思われます。それで目をつぶって何か叫んで逃げたくなりますが、目をつぶると桜の木にぶつかるので目をつぶるわけにも行きませんから、いっそう気違いになるのでした。

けれども山賊は落付いた男で、後悔こうかいということ知ら

ない男ですから、これはおかしいと考えたのです。ひとつ、来年、考えてやろう。そう思いました。今年は考える気がしなかったのです。そして、来年、花がさいたら、そのときじっくり考えようと思いました。毎年そう考えて、もう十何年もたち、今年もまた、来年になったら考えてやろうと思って、また、年が暮れてしまいました。

そう考えているうちに、始めは一人だった女房にようぼうがもう七人にもなり、八人目の女房をまた街道から女の亭主ていしゅの着物と一緒いっしょにさらってきました。女の亭主は殺してききました。

山賊は女の亭主を殺す時から、どうも変だと思っていました。いつもと勝手が違うのです。どここということは分らぬけれども、変てこで、けれども彼の心は物にこだわることに慣れませないので、そのときも格別深く心にとめませんでした。

山賊は始めは男を殺す気はなかったのですが、身ぐるみ脱がせて、いつもするようにとつとと失せろと蹴とばしてやるつもりでしたが、女が美しすぎたので、ふと、男を斬りすてていました。彼自身に思いがけない出来事であったばかりでなく、女にとつても思いがけない出来事だつ

たしるしに、山賊がふりむくと女は腰こしをぬかして彼の顔をぼんやり見つめました。今日からお前は俺おれの女房だと言うと、女はうなずきました。手をとって女を引き起すと、女は歩けないからオブっておくれと言います。山賊は承知承知と女を軽々と背負って歩きましたが、険しい登り坂へきて、ここは危いから降りて歩いてもらおうと言つても、女はしがみついて厭々いやいや、厭ヨ、と言つて降りません。

「お前のような山男が苦しがるほどの坂道をどうして私が歩けるものか、考えてごらんよ」

「そうか、そうか、よしよし」と男は疲れて苦しくても好機嫌こうきげんでした。「でも、一度だけ降りておくれ。私は強いのだから、苦しくて、一休みしたいというわけじゃない。眼の玉が頭の後側にあるというわけのものじゃないから、さつきからお前さんをオブっついてもなんとなくもどかしくて仕方がないのよ。一度だけ下へ降りてかわい顔かわいを拝ましてもらいたいものだ」

「厭よ、厭よ」と、また、女はやけに首っ玉にしがみつきました。「私はこんな淋さびしいところにいつときもジツとしていられないヨ。お前のうちのあるところまでいっ

ときも休まず急いでおくれ。さもないと、私はお前の女房になってやらないよ。私にこんな淋しい思いをさせるなら、私は舌を嚙^かんで死んでしまおうから」

「よしよし。分った。お前のたのみはなんでもきいてやろう」

山賊はこの美しい女房を相手に未来のたのしみを考えて、とけるような幸福を感じました。彼は威^い張^ばりかえって肩^{かた}を張^かって、前の山、後の山、右の山、左の山、ぐるりと一回転して女に見せて、

「これだけの山という山がみんな俺のものなんだぜ」

と言いましたが、女はそんなことにはてんで取りあいません。彼は意外にまた残念で、

「いいかい。お前の目に見える山という山、木という木、谷という谷、その谷からわく雲まで、みんな俺のものなんだぜ」

「早く歩いておくれ。私はこんな岩コブだらけの崖がけの下にいたくないのだから」

「よし、よし。今にうちにつくと飛びきりの御馳走ごちそうをこしらえてやるよ」

「お前はもっと急げないのかえ。走っておくれ」

「なかなかこの坂道は俺が一人でもそうは駈かけられない難所だよ」

「お前も見かけによらない意気地なしだねえ。私としたことが、とんだ甲斐かい性しょうなしの女房にやうぼうになってしまった。あ

あ、ああ。これから何をたよりに暮くらしたらいいのだろう」

「なにを馬鹿ばかな。これぐらいの坂道が」

「アア、もどかしいねえ。お前はもう疲れたのかえ」

「馬鹿なことを。この坂道をつきぬけると、鹿しかもかなわぬように走ってみせるから」

「でもお前の息は苦しそうだよ。顔色が青いじゃない

か」

「なんでも物事の始めのうちにはそういうものさ。今に勢いのはずみがつけば、お前が背中で目を廻まわすぐらい速く走るよ」

けれども山賊は身体からだが節々からバラバラに分かれてしまったように疲れていました。そしてわが家の前へ辿たどりついたときには目もくらみ耳もなりしわが嘎れ声のひときれをふりしぼる力もありません。家の中から七人の女房が迎むかえに出てきました。山賊は石のようにこわばった身体をほぐして背中の女を下すだけで精せい一いっ杯ぱいでした。

七人の女房は今までに見かけたこともない女の美しさに打たれましたが、女は七人の女房の汚きたなさに驚おどろきました。七人の女房の中には昔はかなり綺麗きれいな女もいたのですが今は見る影かげもありません。女は薄うす気味き悪みがつて男の背へしりぞいて、

「この山女は何なのよ」

「これは俺の昔の女房なんだよ」

と男は困って「昔の」という文句を考えついて加えたのは、とっさの返事にしては良く出来ていましたが、女は容赦ようしやがありません。

「まア、これがお前の女房かえ」

「それは、お前、俺はお前のような可愛^{かわ}い女がいろいろとは知らなかったのだからね」

「あの女を斬り殺しておくれ」

女はいちばん顔形のととのった一人を指して叫びました。

「だって、お前、殺さなくつとも、女中だと思えばいいじゃないか」

「お前は私の亭主を殺したくせに、自分の女房が殺せないのかえ。お前はそれでも私を女房にするつもりなのか

え」

男の結ばれた口から呻うめきがもれました。男はとびあがるように一躍ひとおどりして指された女を斬り倒たおしていました。しかし、息つくひまもありません。

「この女よ。今度は、それ、この女よ」

男はためらいましたが、すぐズカズカ歩いて行って、女の頸くびへザクリとダンビラを斬りこみました。首がまだコロコロととまらぬうちに、女のふっくらツヤのある透すきとおる声は次の女を指して美しく響ひびいていました。

「この女よ。今度は」

指さされた女は両手に顔をかくしてキヤーという叫び声をはりあげました。その叫びにふりかぶって、ダンビラは宙を閃ひらめいて走りましました。残る女たちはにわかに一時にたち上って四方に散りました。

「一人でも逃にがしたら承知しないよ。藪やぶの陰かげにも一人いるよ。上手かみてへ一人逃げて行くよ」

男は血刀をふりあげて山の林を駆け狂いました。たった一人逃げおくれ腰をぬかした女がいました。それはいちばん醜みにくくて、ビッコの女でしたが、男が逃げた女を一人あまさず斬りすてて戻もどってきて、無造作にダンビ

ラをふりあげますと、

「いいのよ。この女だけは。これは私が女中に使うから」

「ついでだから、やってしまおうよ」

「バカだね。私が殺さないでおくれと言うのだよ」

「アア、そうか。ほんとだ」

男は血刀を投げすてて屍しりもちをつきました。疲れがどツとこみあげて目がくらみ、土から生えた屍のように重みがつてきました。ふと静寂に気がつきました。とびたつような怖ろしさがこみあげ、ぎよツとして振向ふりむくと、

女はそこにいくらかやる瀬ない風情でたたずんでいます。男は悪夢からさめたような気がしました。そして、目も魂たましいも自然に女の美しさに吸いよせられて動かなくなってしまうました。けれども男は不安でした。どういう不安だか、なぜ、不安だか、何が、不安だか、彼には分らぬのです。女が美しすぎて、彼の魂がそれに吸いよせられていたので、胸の不安の波立ちをさして気にせず
にいられただけです。

なんだか、似ているようだな、と彼は思いました。似たことが、いつか、あった、それは、と彼は考えました。

アア、そうだ、あれだ。気がつくとき彼はびっくりしました。

桜の森の満開の下です。あの下を通る時に似ていました。どこが、何が、どんな風に似ているのだから分りません。けれども、何か、似ていることは、たしかでした。彼にはいつもそれぐらいのことしか分らず、それから先は分らなくても気にならぬたちの男でした。

山の長い冬が終り、山のとっぺんの方や谷のくぼみに樹の陰に雪はポツポツ残っていましたが、やがて花の季節が訪れようとして春のきざしが空いちめんにかがやい

ていました。

今年、桜の花が咲いたら、と、彼は考えました。花の下にさしかかる時はまだそれほどではありません。それで思いきって花の下へ歩いてみます。だんだん歩くうちに気が変になり、前も後も右も左も、どっちを見ても上にかぶさる花ばかり、森のまんなかめくらめっぼうに近づくと怖しさに盲滅法めくらめっぼうたまらなくなるのでした。今年はひとつ、あの花ざかりの林のまんなかで、ジツと動かずに、いや、思いきって地べたに坐すわってやろう、と彼は考えました。そのとき、この女もつれて行こうか、彼はふと考えて、女の

顔をチラと見ると、胸さわぎがして慌あわてて目をそらし
ました。自分の肚はらが女に知れては大変だという気持が、な
ぜだか胸に焼け残りました。

*

女は大変なわがまま者でした。どんなに心をこめた御
馳走をこしらえてやっても、必ず不服を言いました。彼
は小鳥や鹿をとり、山を走りました。猪いのししも熊くまもとりま
した。ビツコの女は木の芽や草の根をさがしてひねもす

林間をさまよいました。しかし女は満足を示したことはありません。

「毎日こんなものを私に食べというのかえ」

「だって、飛び切りの御馳走なんだぜ。お前がここへくるまでは、十日に一度ぐらいしかこれだけのものは食わなかつたものだ」

「お前は山男だからそれでいいのだらうさ。私の喉は通らないよ。こんな淋しい山奥で、夜の夜長にきくものと云えば梟ふくろうの声ばかり、せめて食べる物でも都おとに劣らぬおいしい物が食べられないものかねえ。都の風がどんなも

のか。その都の風をせきとめられた私の思いのせつなさ
がどんなものか、お前には察さつすることも出来ないのだね。
お前は私から都の風をもぎとって、その代りにお前の呉く
れた物といえからすば鴉からすや梟うしほの鳴く声ばかり。お前はそれを羞はぢ
かしいとも、むごたらしいとも思わないのだよ」

女の怨えんじる言葉の道理が男には呑のみこめなかつたので
す。なぜなら男は都の風がどんなものだか知りません。
見当もつかないのです。この生活この幸福に足りないも
のがあるという事実について思い当るものがない。彼は
ただ女の怨えんじる風情の切とうなさわくに当惑とうわくし、それをどのよう

に処置してよいか目当について何の事実も知らないの
で、もどかしさに苦しみました。

今までには都からの旅人を何人殺したか知れませんが。

都からの旅人は金持で所持品も豪華ごうかですから、都は彼の

よい鴨かもで、せつかく所持品を奪うばってみても中身がつまら

なかつたりするとチエツこの田舎者いなかもめ、とか土百姓どびやくしやうめと

か罵ののったもので、つまり彼は都についてはそれだけが

知識の全部で、豪華な所持品をもつ人達のいるところで

あり、彼はそれをまきあげるといふ考え以外に余念はあ
りませんでした。都の空がどっちの方角だということす

らも、考えてみる必要がなかったのです。

女は櫛くしだの笄こうがいだの簪かんざしだの紅べにだのを大事にしました。

彼が泥どろの手や山の獣けものの血にぬれた手でかすかに着物にふれただけでも女は彼を叱しかりました。まるで着物が女のいのちであるように、そしてそれをまもることが自分のつとめであるように、身の廻りを清潔にさせ、家の手入れを命じます。その着物は一枚の小袖こそでと細紐ほそひもだけでは事足りず、何枚かの着物といくつももの紐と、そしてその紐は妙みょうな形にむすばれ不必要に垂れ流されて、色々の飾かざり物をつけたすことよって一つの姿が完成されて行く

のでした。男は目を見はりました。そして嘆声たんせいをもらしました。彼は納得させられたのです。かくして一つの美が成りたち、その美に彼が満たされている、それは疑うたぐる余地がない、個としては意味をもたない不完全かつ不可解な断片が集まることによって一つの物を完成する、その物を分解すれば無意味なる断片に帰する、それを彼は彼らしく一つの妙たえなる魔術まじゆつとして納得させられたのでした。

男は山の木を切りだして女の命じるものを作ります。何物が、そして何用につくられるのか、彼自身それを作

りつつあるうちは知ることが出来ないのでした。それは胡床こしよと肱掛ひじかけでした。胡床はつまり椅子です。お天気の日、女はこれを外へ出させて、日向ひなたに、また、木陰に、腰かけて目をつぶります。部屋の中では肱掛にもたれて物思いにふけるような、そしてそれは、それを見る男の目にはすべてが異様な、なまめかしく、なやましい姿に外ならぬのでした。魔術は現実に行われており、彼自らがその魔術の助手でありながら、その行われる魔術の結果に常にいぶかりそして嘆賞するのでした。

ビッコの女は朝ごとに女の長い黒髪くろかみをくしけずりま

す。そのために用いる水を、男は谷川の特に遠い清水からくみとり、そして特別そのように注意を払うほら自分の労苦をなつかしみました。自分自身が魔術の一つの力になりたいということが男の願いになっていました。そして彼自身くしけずられる黒髪にわが手を加えてみたいものだと思えます。いやよ、そんな手は、と女は男を払いのけて叱ります。男は子供のように手をひっこめて、てれながら、黒髪にツヤが立ち、結ばれ、そして顔があらわれ、一つの美が描えがかれ生まれてくることを見果てぬ夢ゆめに思うのでした。

「こんなものがなあ」

彼は模様のある櫛や飾のある笄をいじり廻しました。

それは彼が今までは意味も値打もみとめることのできなかつたものでしたが、今もなお、物と物との調和や関係、飾りという意味の批判はありません。けれども魔力が分ります。魔力は物のいのちでした。物の中にもいのちがあります。

「お前がいじってはいけないよ。なぜ毎日きまつたように手をだすのだらうね」

「不思議なものだなア」

「何が不思議なのさ」

「何がってこともないけどさ」

と男はてれました。彼には驚きがありました。その対象は分らぬのです。

そして男に都を怖れる心が生れていました。その怖れは恐怖きょうふではなく、知らないということに対する羞恥しゆうちと不安で、物知りが未知の事柄ことがらにいたく不安と羞恥おびに似ていました。女が「都」というたびに彼の心は怯おびえて戦おのきました。けれども彼は目に見える何物も怖れたことがなかった。怖れの心になじみがなく、羞はじる心にも馴な

れていません。そして彼は都に対して敵意だけをもちました。

何百何千の都からの旅人を襲おそったが手に立つ者がなかったのだから、と彼は満足して考えました。どんな過去を思いだしても、裏切られ傷きずけられる不安がありません。それに気付くと、彼は常に愉快ゆかいでまた誇ほこりやかでした。彼は女の美に対して自分の強さを対比しました。そして強さの自覚の上で多少の苦手と見られるものは猪だけでした。その猪も実際はさして怖るべき敵でもないのです、彼はゆとりがありました。

「都には牙きばのある人間がいるかい」

「弓をもったサムライがいるよ」

「ハツハツハ。弓なら俺は谷の向うの雀すずめの子でも落すのだからな。都には刀が折れてしまおうような皮の堅かたい人間はいないだろう」

「鎧よろいをきたサムライがいるよ」

「鎧は刀が折れるのか」

「折れるよ」

「俺は熊も猪も組み伏ふせてしまおうのだからな」

「お前が本当に強い男なら、私を都へ連れて行っておく

れ。お前の力で、私の欲しい物、都の粹すいを私の身の廻りへ飾っておくれ。そして私にシンから楽しい思いを授けてくれることができるなら、お前は本当に強い男なのさ」
「わけのないことだ」

男は都へ行くことに心をきめました。彼は都にありとある櫛や笄や簪や着物や鏡や紅を三日三晩とたたないうちに女の廻りへ積みあげてみせるつもりでした。何の気がかりもありません。一つだけ気にかかることは、まったく都に関係のない別なことでした。

それは桜の森でした。

二日か三日の後に森の満開が訪れようとしていました。今年こそ、彼は決意していました。桜の森の花ざかりのまんなかで、身動きもせずジツと坐っていてみせる。彼は毎日ひそかに桜の森へでかけて蕾つぼみのふくらみをはかっています。あと三日、彼は出発を急ぐ女に言いしました。

「お前に支度の面倒めんどうがあるものかね」と女は眉まゆをよせました。「じらさないでおくれ。都が私をよんでいるのだよ」

「それでも約束やくそくがあるからね」

「お前がかえ。この山奥に約束した誰だれがいるのさ」

「それは誰もいないけれども、ね。けれども、約束があるのだよ」

「それはマア珍めずしいことがあるものだねえ。誰もいなくて誰と約束するのだえ」

男は嘘うそがつけなくなりました。

「桜の花が咲くのだよ」

「桜の花と約束したのかえ」

「桜の花が咲くから、それを見てから出掛でけなければならぬのだよ」

「どういうわけで」

「桜の森の下へ行ってみなければならぬからだよ」

「だから、なぜ行ってみなければならぬのよ」

「花が咲くからだよ」

「花が咲くから、なぜさ」

「花の下は冷めたい風がはりつめているからだよ」

「花の下にかえ」

「花の下は涯はてがないからだよ」

「花の下がかえ」

男は分らなくなつてクシヤクシヤしました。

「私も花の下へ連れて行っておくれ」

「それは、だめだ」

男はキツパリ言いました。

「一人でなくちゃ、だめなんだ」

女は苦笑しました。

男は苦笑というものは始めて見ました。そんな意地の悪い笑いを彼は今まで知らなかったのです。そしてそれを彼は「意地の悪い」という風には判断せずに、刀で斬っても斬れないように、と判断しました。その証拠しょうこには、苦笑は彼の頭にハンを捺おしたように刻みつけられて

しまったからです。それは刀の刃はのように思いだすたびにチクチク頭をきりました。そして彼がそれを斬ること
はできないのでした。

三日目がきました。

彼はひそかに出かけました。桜の森は満開でした。一足ふみこむとき、彼は女の苦笑を思いだしました。それは今までに覚えのない鋭すどどさで頭を斬りました。それだ
けでもう彼は混乱していました。花の下の冷めたさは涯
のない四方からドツと押し寄せてきました。彼の身体は
たちまちその風に吹きさらされて透明とうめいになり、四方の風

はゴウゴウと吹き通り、すでに風だけがはりつめているのでした。彼の声のみが叫びました。彼は走りました。何という虚空こくうでしょう。彼は泣き、祈りいの、もがき、ただ逃げ去ろうとしていました。そして、花の下をぬけだしたことが分ったとき、夢の中から我にかえった同じ気持ちを見出しました。夢と違っていることは、本当に息も絶え絶えになっている身の苦しさでありました。

*

男と女とビツコの女は都に住みはじめました。

男は夜ごとに女の命じる邸宅へ忍び入りました。着物や宝石や装身具も持ちだしましたが、それのみが女の心を充たす物ではありませんでした。女の何より欲しがるものは、その家に住む人の首でした。

彼等の家にはすでに何十の邸宅の首が集められています。部屋の四方の衝立に仕切られて首は並べられ、ある首はつるされ、男には首の数が多すぎてどれがどれやら分らなくとも、女は一々覚えており、すでに毛がぬけ、肉がくさり、白骨になっても、どここのたれということ

よく覚えていました。男やビツコの女が首の場所を変え
ると怒り、ここはどこの家族、ここは誰の家族とやかま
しく言いました。

女は毎日首遊びをしました。首は家来をつれて散歩に
でます。首の家族へ別の首の家族が遊びに来ます。首が恋
をします。女の首が男の首をふり、また、男の首が女の
首をすてて女の首を泣かせることもありました。

姫君の首は大納言の首にだまされました。大納言の首
は月のない夜、姫君の首の恋する人の首のふりをして忍
んで行って契りを結びます。契りの後に姫君の首が気が

つきます。姫君の首は大納言の首を憎むにくことができず我が身のさだめの悲しさに泣いて、尼あまになるのです。すると大納言の首は尼寺へ行つて、尼になった姫君の首を犯します。姫君の首は死のうとしますが大納言のささやきに負けて尼寺を逃げて山科やましなの里へかくれて大納言の首のかこい者となつて髪の毛を生やします。姫君の首も大納言の首もはや毛がぬけ肉がくさりウジ虫がわき骨がのぞけていました。二人の首は酒もりをして恋にたわぶれ、歯の骨と歯の骨と噛み合つてカチカチ鳴り、くさつた肉がペチャペチャくつつき合い鼻もつぶれ目の玉もく

りぬけていました。

ペチャペチャとくつつき二人の顔の形がくずれるときに女は大喜びで、けたたましく笑いさざめきました。

「ほれ、ホツペタを食べてやりなさい。ああおいしい。姫君の喉のどもたべてやりましょう。ハイ、目の玉もかじりましょう。すすってやりましょうね。ハイ、ペロペロ。アラ、おいしいね。もう、たまらないのよ、ねえ、ほら、ウンとかじりついてやれ」

女はカラカラ笑います。綺麗な澄すんだ笑い声です。薄い陶器とうぎが鳴るような爽さわやかな声でした。

坊主の首もありました。坊主の首は女に憎がられていました。いつも悪い役をふられ、憎まれて、なぶり殺しにされたり、役人に処刑しよけいされたりしました。坊主の首は首になって後にかえって毛が生え、やがてその毛もぬけてくさりはて、白骨になりました。白骨になると、女は別の坊主の首を持ってくるように命じました。新しい坊主の首はまだうら若い水々しい稚子ちごの美しさが残っていませんでした。女はよろこんで机にのせ酒をふくませ頬ほおずりして舐なめたりくすぐったりしましたが、じきあきました。

「もつと太った憎たらしい首よ」

女は命じました。男は面倒になって五ツほどブラさげて来ました。ヨボヨボの老僧ろうそうの首も、眉まゆの太い頬ほっぺたの厚い、蛙かえるがしがみついているような鼻の形の顔もありました。耳のとがった馬のような坊主の首も、ひどく神妙な首の坊主もあります。けれども女の気に入ったのは一つでした。それは五十ぐらいの大坊主の首で、ブ男で目尻がたれ、頬がたるみ、唇くちびるが厚くて、その重さで口があいているようなだらしない首でした。女はたれた目尻りょうはしの両端を両手の指の先で押えて、クリクリと吊つりあげて廻したり、獅子鼻ししなの孔あなへ二本の棒をさしこんだり、

逆さに立ててころがしたり、だきしめて自分のお乳を厚い唇の間へ押しこんでシャブらせたりして大笑いしました。けれどもじきにあきました。

美しい娘むすめの首がありました。清らかな静かな高貴な首でした。子供っぽくて、そのくせ死んだ顔ですから妙に大人おとなびた憂うれいがあり、閉じられたマブタの奥おくに楽しい思いも悲しい思いもマセた思いも一度にゴツちやにかく隠されていようでした。女はその首を自分の娘か妹のように可愛がりました。黒い髪の毛をすいてやり、顔にお化粧けししょうしてやりました。ああでもない、こうでもないと念を入

れて、花の香りのむらだつようなやさしい顔が浮きあがりました。

娘の首のために、一人の若い貴公子の首が必要でした。貴公子の首も念入りにお化粧され、二人の若者の首は燃え狂うような恋の遊びにふけります。すねたり、怒ったり、憎んだり、嘘をついたり、だましたり、悲しい顔をしてみせたり、けれども二人の情熱が一度に燃えあがるときは一人の火がめいめい他の一人を焼きこがしてどつちも焼かれて舞いあがる火焰になって燃えまじりました。けれども間もなく悪侍だの色好みの大人だの悪僧

だの汚い首が邪魔じやまにでて、貴公子の首は蹴けられて打たれたあげくに殺されて、右から左から前から後から汚い首がゴチャゴチャ娘に挑いどみかかって、娘の首には汚い首の腐った肉がへばりつき、牙きばのような歯に食いつかれ、鼻の先が欠けたり、毛がむしられたりします。すると女は娘の首を針でつついて穴をあけ、小刀で切ったり、えぐったり、誰の首よりも汚らしい目も当てられない首にして投げだすのでした。

男は都を嫌きらいました。都の珍らしさも馴なれてしまうと、なじめない気持ばかりが残りました。彼も都では人並に

水干すいかんを着ても脛すねをだして歩いていました。白昼は刀をさすことも出来ません。市いちへ買物に行かなければなりませんし、白首しろくびのいる居酒屋で酒をのんでも金を払わねばなりません。市の商人は彼をなぶりしました。野菜をつんで売りにくる田舎女も子供までなぶりしました。白首も彼を笑いました。都では貴族は牛車ぎっしゃで道のまんなかを通りまします。水干をきた跣足はだしの家来はたいがいふるまい酒に顔を赤くして威張りいばちらして歩いて行きました。彼はマヌケだのバカだのノロマだのと市でも路上でもお寺の庭でも怒鳴どなられました。それでもうそれぐらいのことには腹が

立たなくなっていました。

男は何よりも退屈たいくつに苦しみました。人間共というものは退屈なものだ、と彼はつくづく思いました。彼はつまり人間がうるさいのでした。大きな犬が歩いていると、小さな犬が吠ほえます。男は吠えられる犬のようなものでした。彼はひがんだり嫉ねたんだりすねたり考えたりするところが嫌いでした。山の獣や樹や川や鳥はうるさくはなかつたがな、と彼は思いました。

「都は退屈なところだなア」と彼はビツコの女に言いました。「お前は山へ帰りたいたいと思わないか」

「私は都は退屈ではないからね」

とビツコの女は答えました。ビツコの女は一日中料理をこしらえ洗濯せんたくし近所の人達とお喋りしゃべしていました。

「都ではお喋りができるから退屈しないよ。私は山は退屈で嫌いさ」

「お前はお喋りが退屈でないのか」

「あたりまえさ。誰だって喋っていれば退屈しないものだよ」

「俺は喋れば喋るほど退屈するのになあ」

「お前は喋らないから退屈なのさ」

「そんなことがあるものか。喋ると退屈するから喋らないのだ」

「でも喋ってごらんよ。きっと退屈を忘れるから」
「何を」

「何でも喋りたいことをさ」

「喋りたいことなんかあるものか」

男はいまいましがってアクビをしました。

都にも山がありました。しかし、山の上には寺があったり庵いおりがあったり、そして、そこにはかえって多くの人の往来がありました。山から都が一日に見えます。な

んというたくさんの家だろう。そして、なんという汚い眺ながめだろう、と思いました。

彼は毎晩人を殺していることを昼はほとんど忘れていました。なぜなら彼は人を殺すことにも退屈たいくつしているからでした。何も興味はありません。刀で叩たたくと首がポロリと落ちていているだけでした。首はやわらかいものでした。骨の手応てごたえはまったく感じることがないので、大根を斬るのと同じようなものでした。その首の重さの方が彼にはよほど意外でした。

彼には女の気持が分るような気がしました。鐘かねつき堂

では一人の坊主がヤケになって鐘をついています。何と
いうバカげたことをやるのだらうと彼は思いました。何
をやりだすか分りません。こういう奴等やつらと顔を見合って
暮すくらとしたら、俺でも奴等を首にして一緒に暮すことを
選ぶだらうさ、と思うのでした。

けれども彼は女の欲望にキリがないので、そのことに
も退屈していたのでした。女の欲望は、いわば常にキリ
もなく空を直線に飛びつづけている鳥のようなものでし
た。休むひまもなく常に直線に飛びつづけているのです。
その鳥は疲れません。常に爽快そうかいに風をきり、スイスイと

小気味よく無限に飛びつづけているのでした。

けれども彼はただの鳥でした。枝から枝を飛び廻り、たまに谷を渉わたるぐらいがせいぜいで、枝にとまってうたたねしている梟ふくろうにも似ていました。彼は敏捷びんしょうでした。

全身がよく動き、よく歩き、動作は生き生きしていました。彼の心はしかし尻の重たい鳥なのでした。彼は無限に直線に飛ぶことなどは思いもよらないのです。

男は山の上から都の空を眺めています。その空を一羽の鳥が直線に飛んで行きます。空は昼から夜になり、夜から昼になり、無限の明暗がくりかえしつづきます。そ

の涯はてに何もなくていつまでたってもただ無限の明暗があるだけ、男は無限を事実において納得することが出来ません。その先の日、その先の日、そのまた先の日、明暗の無限のくりかえしを考えます。彼の頭は割れそうになりました。それは考えの疲れでなしに、考えの苦しさのためでした。

家へ帰ると、女はいつものように首遊びに耽ふけっていました。彼の姿を見ると、女は待ち構えていたのです。 「今夜は白拍子しらびょうしの首を持ってきておくれ。とびきり美しい白拍子の首だよ。舞まいいを舞わせるのだから。私いまようが今様

を唄うたってきかせてあげるよ」

男はさつき山の上から見つめていた無限の明暗を思いだそうとしました。この部屋があいつまでも涯のない無限の明暗のくりかえしの空のはずですが、それはもう思いだすことができません。そして女は鳥ではなしに、やっぱり美しいいつもの女でありました。けれども彼は答えました。

「俺は厭いやだよ」

女はびっくりしました。そのあげくに笑いだしました。「おやおや。お前も臆おくびょう病風に吹かれたの。お前もただの

弱虫ね」

「そんな弱虫じゃないのだ」

「じゃ、何さ」

「キリがないから厭になったのさ」

「あら、おかしいね。なんでもキリがないものよ。毎日毎日ごはんを食べて、キリがないじゃないか。毎日毎日ねむって、キリがないじゃないか」

「それと違うのだ」

「どんな風に違うのよ」

男は返事につまりました。けれども違うと思いました。

それで言いくるめられる苦しさを逃^{のが}れて外へ出ました。

「白拍子の首をもつておいで」

女の声が後から呼びかけましたが、彼は答えませんでした。

彼は、なぜどんな風に違ふのだろうと考えましたが分りません。だんだん夜になりました。彼はまた山の上へ登りました。もう空も見えなくなっていました。

彼は気がつくと、空が落ちてくることを考えていました。空が落ちてきます。彼は首をしめつけられるように苦しんでいました。それは女を殺すことでした。

空の無限の明暗を走りつづけることは、女を殺すこと
によって、とめることができます。そして、空は落ちて
きます。彼はホツとすることができません。しかし、彼の
心臓には孔あながあいているのでした。彼の胸から鳥の姿が
飛び去り、掻かき消えているのでした。

あの女が俺なんだろうか？　そして空を無限に直線に
飛ぶ鳥が俺自身だったのだろうか？　と彼は疑うたぐりまし
た。女を殺すと、俺を殺してしまうのだろうか。俺は何
を考えているのだろうか？

なぜ空を落さねばならないのだか、それも分らなくな

っていました。あらゆる想念が捉えがたいものでありま
した。そして想念のひいたあとに残るものは苦痛のみで
した。夜が明けました。彼は女のいる家へ戻る勇気が失
われていました。そして数日、山中をさまよいました。

ある朝、目がさめると、彼は桜の花の下にねていまし
た。その桜の木は一本でした。桜の木は満開でした。彼
は驚いて飛び起きましたが、それは逃げだすためではあ
りません。なぜなら、たった一本の桜の木でしたから。
彼は鈴鹿すずかの山の桜の森のことを突然とつぜん思いだしていたので
した。あの山の桜の森も花盛りにちがいはありません。彼

はなつかしさに吾^{われ}を忘れ、深い物思いに沈^{しず}みました。

山へ帰ろう。山へ帰るのだ。なぜこの単純なことを忘れていたのだろうか？　そして、なぜ空を落すことなどを考え耽^{ふけ}っていたのだろうか？　彼は悪夢^{あくむ}のさめた思いがしました。救われた思いがしました。今までその知覚まで失っていた山の早春の匂^{にお}いが身にせまって強く冷たく分るのでした。

男は家へ帰りました。

女は嬉^{うれ}しげに彼を迎えました。

「どこへ行っていたのさ。無理なことを言ってお前を苦

しめてすまなかつたわね。でも、お前がいなくなっ
てからの私の淋^{さび}しさを察しておくれな」

女がこんなによさしいことは今までにないことで
した。男の胸は痛みました。もうすこしで彼の決意はと
けて消えてしまいそうです。けれども彼は思い決しました。

「俺は山へ帰ることにしたよ」

「私を残してかえ。そんなむごたらしいことがどうして
お前の心に棲^すむようになったのだろう」

女の眼は怒りに燃えました。その顔は裏切られた口惜^{くや}
しさでいっぱいでした。

「お前はいつからそんな薄情者はくじょうものになったのよ」

「だからさ。俺は都がきらいなんだ」

「私という者がいてもかえ」

「俺は都に住んでいたくないだけなんだ」

「でも、私がいるじゃないか。お前は私が嫌いになったのかえ。私はお前のいない留守るすはお前のことばかり考えていたのだよ」

女の目に涙なみだの滴しずくが宿りました。女の目に涙の宿ったのは始めてのことでした。女の顔にはもはや怒りは消えていました。つれなさを恨うらむ切なさのみが溢あふれていまし

た。

「だってお前は都でなきや住むことができないのだから。俺は山でなきや住んでいられないのだ」

「私はお前と一緒いっしょでなきや生きていられないのだよ。私の思いがお前には分らないのかねえ」

「でも俺は山でなきや住んでいられないのだぜ」

「だから、お前が山へ帰るなら、私も一緒に山へ帰るよ。私はたとえ一日でもお前と離はなれて生きていられないのだもの」

女の目は涙にぬれていました。男の胸に顔を押しあて

て熱い涙をながしました。涙の熱さは男の胸にしみましました。

たしかに、女は男なしでは生きられなくなっていました。新しい首は女のいのちでした。そしてその首を女のためにもたらす者は彼の外にはなかったからです。彼は女の一部でした。女はそれを放すわけにいきません。男のノスタルジイがみたされたとき、再び都へつれもどす確信が女にはあるのです。

「でもお前は山で暮せるかえ」

「お前と一緒にならどこでも暮すことができるよ」

「山にはお前の欲しがるような首がないのだぜ」

「お前と首と、どっちか一つを選ばなければならぬなら、私は首をあきらめるよ」

夢ではないかと男は疑りました。あまり嬉しすぎて信じられないからでした。夢にすらこんな願ってもないことは考えることが出来なかったのです。

彼の胸は新たな希望でいっぱいでした。その訪れは唐突で乱暴で、今のさつきまでの苦しい思いが、もはや捉えがたい彼方へ距てられています。彼はこんなにやさしくはなかつた昨日までの女のこととも忘れしました。今と明

日があるだけでした。

二人は直ただちに出発しました。ビツコの女は残すことにしました。そして出発のとき、女はビツコの女に向って、じき帰ってくるから待っておいで、とひそかに言い残しました。

*

目の前に昔の山々の姿が現れました。呼べば答えるよ
うでした。旧道をとることにしました。その道はもう踏ふ

む人がなく、道の姿は消え失せて、ただの林、ただの山坂になっていました。その道を行くと、桜の森の下を通ることになるのです。

「背負っておくれ。こんな道のない山坂は私は歩くことができないよ」

「ああ、いいとも」

男は軽々と女を背負いました。

男は始めて女を得た日のことを思いだしました。その日も彼は女を背負って峠のあちら側の山径を登ったのです。その日も幸せでいっぱいでしたが、今日の幸せ

はさらに豊かなものでした。

「はじめてお前に会った日もオンブして貰ったわね」と、女も思いだして、言いました。

「俺もそれを思いだしていたのだぜ」

男は嬉しそうに笑いました。

「ほら、見えるだろう。あれがみんな俺の山だ。谷も木も鳥も雲まで俺の山さ。山はいいなあ。走ってみたくなくなるじゃないか。都ではそんなことはなかったからな」

「始めての日はオンブしてお前を走らせたものだったわね」

「ほんとだ。ずいぶん疲れて、目がまわったものさ」
男は桜の森の花ざかりを忘れてはいませんでした。しかし、この幸福な日に、あの森の花ざかりの下が何ほどのものでしょうか。彼は怖れていませんでした。

そして桜の森が彼の眼前に現れてきました。まさしく一面の満開でした。風に吹かれた花びらがパラパラと落ちていきます。土肌つちはだの上は一面に花びらがしかれていました。この花びらはどこから落ちてきたのだろうか？ なぜなら、花びらの一ひらが落ちたとも思われぬ満開の花のふさが見はるかす頭上にひろがっているからでした。

男は満開の花の下へ歩きこみました。あたりはひっそりと、だんだん冷めたくなるようでした。彼はふと女の手が冷めたくなっているのに気がつきました。にわかには不安になりました。とっさに彼は分りました。女が鬼おにであることを。突然どツという冷めたい風が花の下の四方の涯はてから吹きよせていました。

男の背中にしがみついているのは、全身が紫色むらさきいろの顔の大きな老婆ろうばでした。その口は耳までさけ、ちぢくれた髪の毛は緑でした。男は走りました。振り落ふそうとしました。鬼の手に力がこもり彼の喉のどにくいこみました。彼

の目は見えなくなろうとしました。彼は夢中でした。全身の力をこめて鬼の手をゆるめました。その手の隙間すきまから首をぬくと、背中をすべって、どさりと鬼は落ちました。今度は彼が鬼に組みつく番でした。鬼の首をしめました。そして彼がふと気付いたとき、彼は全身の力をこめて女の首をしめつけ、そして女はすでに息絶えています。

彼の目は霞かすんでいました。彼はより大きく目を見開くことを試みましたが、それによって視覚が戻ってきたように感じるできませんでした。なぜなら、彼のし

め殺したのはさつきと変わらずやはり女で、同じ女の屍したたい体がそこに在るばかりだからでありました。

彼の呼吸はとまりました。彼の力も、彼の思念も、すべてが同時にとまりました。女の屍体の上には、すでに幾いくつかの桜の花びらが落ちてきました。彼は女をゆさぶりました。呼びました。抱だきました。徒労でした。彼はワツと泣きふしました。たぶん彼がこの山に住みついてから、この日まで、泣いたことはなかったでしょう。そして彼が自然に我にかえったとき、彼の背には白い花びらがつもっていました。

そこは桜の森のちょうどまんなかのあたりでした。四方の涯は花にかくれて奥が見えませんでした。日頃のよ
うな怖れや不安は消えていました。花の涯から吹きよせ
る冷めたい風もありません。ただひっそりと、そしてひ
そひそと、花びらが散りつづけているばかりでした。彼
は始めて桜の森の満開の下に坐っていました。いつまで
もそこに坐っていることができます。彼はもう帰るとこ
ろがないのですから。

桜の森の満開の下の秘密は誰だれにも今も分りません。あ
るいは「孤独こどく」というものであったかも知れません。な

ぜなら、男はもはや孤独を怖れる必要がなかったのです。彼自らが孤独自体でありました。

彼は始めて四方を見廻しました。頭上に花がありました。その下にひっそりと無限の虚空こくうがみちていました。ひそひそと花が降ります。それだけのことです。外には何の秘密もないのでした。

ほど経て彼はただ一つのなまあたかな何物かを感じました。そしてそれが彼自身の胸の悲しみであることに気がつきました。花と虚空の冴さえた冷めたさにつつまれて、ほのあたたかいふくらみが、すこしずつ分りかけて

くるのでした。

彼は女の顔の上の花びらをとってやろうとしました。彼の手が女の顔にとどころとした時に、何か変わったことが起ったように思われました。すると、彼の手の下には降りつもった花びらばかりで、女の姿は掻き消えてただ幾つかの花びらになっていました。そして、その花びらを掻き分けようとした彼の手も彼の身体からだも延した時にはもはや消えていました。あとに花びらと、冷めたい虚空がはりつめているばかりでした。

(昭和二十六年六月)

日本文学電子図書館

「坂口安吾 ちくま日本文学009」

著 者：坂口安吾

制作者：宮澤一郎

出版社：筑摩書房

2008年9月25日 第2刷発行

日本文学電子図書館